

作助二寬藏多
孝勘浩善礪
井野池西村
澗中字菊葛嘉

瀧井孝作・中 勘助
宇野浩二・菊池 寛
葛西善蔵・嘉村 儀多

新潮社版

日本文学全集 14

滝井孝作・中 勘助
宇野浩二・菊池 寛
葛西善蔵・嘉村礒多

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／株式会社三秀舎 製本所／大日本製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス・日本クロス工業株式会社

目次

瀧井孝作

無限抱擁

七

中 勘助

銀の匙

一五

宇野浩二

蔵の中

二七

枯木のある風景

三〇九

菊池 寛

無名作家の日記

三三三

忠直卿行状記

三五七

恩讐の彼方に

三八五

葛西 善蔵

哀しき父

四二三

悪魔

四三二

嘉村 磯多

業 苦

崖 の 下

注 解

年 譜

解 説

瀬 沼 茂 樹

四三

四五

四七

四九

五一

瀧井孝作

無限抱擁

一

一の一

浅川駅よりトンネルもなくなり空は夜明であつた。車室の窓ぎわで一人、信一は、霧の間から麦の穂の赤んで居る有様に向いて、

「もう麦が赤む」

と呟いた。麦畠は知らぬ間に色づいて居る。暫時心ひかれた。彼はまた

「戻って来たなあ」

と自分に云うた。上の電気の点って居る、網棚に被り笠、糸立、岳樺の杖、案内者が山刀で伐取り拵えて

呉れた）其が脇に置いてある。

彼は温泉で錆びた銀蓋の懐中時計を、セルの袴の上へ引出した。新宿へ到着までにまだ一時間の余ある故、体は窓ぎわへもたれ彼は寝不足の頭を束ねた糸立へおし当てた。

浅い谷間の窓外に見える、東中野辺りで目が覚めた。車室に学生等が乗込んで居た。

信一は池袋までの切符故、新宿駅で降りて乗換をした。山の手電車の中で、彼の風変りの提げて居る笠が目立った。

朝曇りの空だった。池袋の道の上を歩いて来、路端の新規に店出した小間物屋の前で、信一は齒みがきの類を買った。

何時もの雑司ヶ谷の友達の家は、空屋であつた。信一は其板戸の前で暫時へんな気がした。目白駅の方角の引越先が貼紙に出て居た。

而して信一は復歩いて、尋ね当てた。

原中で平屋建で、友の古びた名札が門柱に掛けてある。生垣内は三坪程の前栽、其処の雨戸は閉され、まだ寝て居る。

其住居は始めてで信一は、起きずに一人門の前で立って居た。信一は、盆槍ぼんやり付んで旅行の引続の甘い感傷に浸るのだった。曇の空から雨の粒が落ちた。僅かに降出し、信一は笠を提げて行んで居た。

銭湯を思いうかべた。一晚石炭殻を被った気持の悪るさ、草臥が銭湯でぬけるなれば、自身は色々の仕事のある体故、すぐ其にかかれると思えた。彼は、歩き出した。

雨は本降りになり一時間程後、信一は戻って来た。被り笠糸立で、湯上りの彼は汗ばんだ。着物の銘仙の羽織に沁こんで居る、温泉の香がきつく匂った。

門は未だ開かなかつた。

やがて、遅く起きた中田夫婦は、信一を内へ入れた。

彼は、雨水の笠と糸立は外へ寄かけ、上り口に袴を脱いで置いて、座敷へ入るのであった。

床の間を見て、一寸見ていた。白日掩荆扉とある半折の出来栄が目に附いた。

中田が薄目で、眼鏡の玉をぬぐいつつ来て坐った故、彼は尋ねた。

「先生の字」

「六花さんだ。先生の処にころがっていたのを貰ってきた」

中田は同人の書の会に加らぬ人であった。其趣味は厭だと云うて、連中を傍観していたが、之を表装して居る処では、中田も何時か一步寄って来て居た。

信一は自身の今朝新宿駅へ着いた由を云うた。先ず仕事の方を共にやっておる雑誌の運びを尋ねた。

友は肯き、今日校了になる筈でもう僅だと答えた。信一に向き

「徳永君が心配して居た故、きょう逢うと良い」と云う。用向の話は其丈であつた。

例の女の方の話、両方で口に云わなかつた。

信一は具體的な考えができてない故曰えず、中田は取留のない心やりの聴手になれぬ故。

「飯にしようや」

年上の友は膝をもち上げた。

柱など節々の多い茶の間に、食卓は備わって居た。

茶の間の隣の室には姿見などがある。

(中田は西国の方のくろうとの女と二人暮しをして自

分を立て貫き、三四年になる。今度は極く普通の借屋住居で、二人は平凡になつて落着いたのだ。

信一は自分もやがて左うなる、自分の女との暮しを思い、玆の有様に氣注ぐのであった。

丸鬚のかづさんも坐つた。熱い飯で、やき海苔、うに、味噌汁の菜で、常の通りである。茶湯台の傍で、彼の旅先の土地の事柄が話題になつた。

かづさんも、彼の事情は知つて居て其を口に云わなかつた。向かい面白くからかうには余り重たい男だし、また道筋を漸と通つた自分共夫婦故、いい加減は曰えなかつた。

「やみそうもないナ」

信一は縁側へ起つて、空を見た。

「出掛けるかな」

「うむ」

玄関でかづさんは彼の持物は

「預つて置きましょう」

と云つて、傘と足駄を揃えて居た。

左うして中田と連立つて出、信一は旅の引続の気分は殆ど無かつた。

伝通院の前で、友と別れて彼は電車を降りた。××学寮で、恩人の徳永翁に逢える。それは商用で出て来て、国の子弟の居る学寮に泊る人であつた。

信一は昨年居た寄宿舎で、知合の学生に何気ない顔で、廊下を通つた。

彼は徳永翁と差向ひになつた。彼は自分の話は田舎で打明け、翁は上京後諏訪の方へあて手紙を寄越して居た。

「雑誌の方は、中田君ひとりのようじゃつたから」

質実な翁は、仕事の方を心配していた。

「え、今逢つて話して来ました。これから印刷屋へゆく筈です」

彼の問題については

「戻つて来たら、先生も自分らと共に話をしたいと云つて居られた」

「はあ」

「今晚、皆で飯でもたべてだと良いな」

と云う。信一はH師に何か云われる覚悟で「じゃ、根岸のH師の宅に来て頂きます」

と其場所を定めて云つた。徳永翁は肯いた。

十分余り居て、信一は出掛けた。

路傍にある自働電話で、彼女へ戻ったこと云おうか稍迷ったが、今日は逢えぬ故と思ひ止った。

例の神田の印刷所では、残り少い校正で二人居なくてもよいので、信一は又、根岸へと向うのであった。日師に何から話す考えは別になかった。

(女とのゆきたてを左に雑とかく)

吉原の□屋に勤めて居る女——本名は松子——を二夕月前四月から見染めて居るのである。

四月の十日に山谷で書の方の会合が、例会でなしに酒を飲む催しがあった。席上友達せいつやの青舎せいしゃにこんな事を頼まれた。昨日家を出た儘で内へ工合悪いしこんなに飲むと又脱線して明日中田と約束してある旅行が出来ないかも知れぬ、信一君共に家へ来て明日旅立させて呉れないかね、と云う頼みであった。信一は青舎の事情を知っていた故、気の弱い友の用心棒になる事を承知した。其晩新聞記者のSと青舎と信一の三人は吉原へ廻りお茶屋へ上った。信一は酒飲ではないが附合し明夕方まで青舎の連れであると思った。青舎は其晩も帰り外れた。あくる日信一は青舎と中田との旅立を上

野駅で見送ったが。

そんな塩梅しんぱいに青舎と共に出掛けて、用心棒の信一が却って入ったのであった。その朝、彼女に云われた。

「お顔が、昨晚と異って居ますワ」

友の青舎は十日程の旅行から戻った。信一は入谷の宅へ出向き友と顔を合せた。旅行の土産話は胸をおどらせた。汽車の窓で見た向う山板谷峠いたやとうげ辺の残雪の感じ。山の肌に残雪が川と云う字に消残り素的な書のある話。某家の古い見事な座敷造りの話。こんどの総選挙で或人に一夜土地の遊郭を奢られて、翌日政談演説をした話。

而して旅して気持の動いた故で、かなり扱われない句作の出来た喜悦。其はこの頃信一も同じ故ノートを見せて喜び合った。

信一は自身も話が溜たまるっていた。□屋へあれから三度、と事を云って「樹木か何か揺さぶられて居る様な」自分の心持を訴えるのであった。

聞いて青舎は、其が恋だらうね君に其芽生めぎが出たんだねとわくわくした。結婚生活と云う話まで出ると、

青舎は肯かなんだが、しかし彼女の年齢——彼の二十下の二十二歳——を尋ねたりした。

其晩中田もやって来て三人で浅草の方を歩いた。信一が相手の女の氣持を懸念している事を曰ったら、中田は

「相手は石塊でも瓦の片でもよいよ、自身が燃えて居れば何時か動く」

と中田の場合かづ女は後で動いた例を持出した。それから

「□屋では、女の居る場所は悪いね、やり難いね。君は思い断るかまわらず突進するか、二タ途だ」

とズカズカと云う。又

「これならと思う女はそう無いから、好きな女が見当ればとるのだが」続けて又「金があるとねエ、一ト月程居続して飽きがこなかったら立派な者故、女房にするんだがね」

と、中田はあすこで五六日も居続しようものなら退屈で叶わない其経験談を持出した。

足は何時か吉原へ入り例の茶屋へ上った。仲之町の一番外れにある茶屋だった。魚河岸××の若主人時分

の青舎を見知る芸者が居て青舎は顔がきいた。女中頭の千代に信一の事を何かとたのんだり、青舎はその晩彼女を見る心組であつたが

「大店はシンミリしない。□屋は厭だ」

中田は持前を云うて肯かず、彼一人送られて往つた。

或日信一は青舎と雑司ヶ谷の中田の宅へ出掛た。もう五月に入つて居た。雑司ヶ谷で、青舎は来がけ電車の中で見かけた女の話の云い出した。信一は引取つて「真向いに腰掛けていた、仏像の顔のような娘さんでしよ」

と云うて又

「窓口から、頸すじへ日が射込んでいた故、僕はうしろの鐵戸を閉めてあげようかと思つた」

「まあ、信一さんは」

と、妓の細君は聞いてそう挿んだ。信一は之まで女などに目もくれない木強漢で通っている故。

「物のあわれを知る人だ、ねエ、いいね」

と、青舎は弁護した。信一は唐突に咬いた。

「旅行、しようかなあ」

——彼は彼女をあすこから出す資力は勿論ない、よし連れて来たにしろ其暮しの道も立ない身であった。

何処からも資は出そうでなかった。彼の周りで一番生活の幅のある根岸の先生も此間「つゝじの白ありたけの金をはらひぬ」の句を作り、其清貧を打明けて笑わせていた位である。また、信一自身の心持が、ぐらりぐらり動揺するのだった。彼は彼女に逢う毎に其実生活が分り、彼はどぎまぎした。逢始の頃は只恍惚感に涵れたが、今はもつと息詰る状態が多くなった。併し其重荷は浪漫的なもの故に、彼の頭の方を僅か反らした折

「旅行に出ようか」

と云う考えが出て来た。

其詞を聞き友達は稍々面を上げた。

「旅行か、うむ宜いね」

中田は頷いて云った。信一は思い迷ったがやがてそれを定めた。雑誌の仕事を中田に頼んで任せた。

根岸へ廻り先生に云う事とした。——この間、先生は其甥の受験生の不勉強の話をした故、信一は自分の図星を指されると思ひ、僕も非道い事をして居ます、

と云つたら、君は未だ純粹な方だ、と先生が云つた

——
信一は根岸で先生にあつて、唯旅行したくなつたと云つた。彼は女の上は告なかつた。先生は別に理由はきかず旅費を出して呉れた。

又、入谷の友の宅へ行った。

「そうか、本当に旅行に出るの」

「えエ」

話して居て晩になり、青舎は雜司ヶ谷へ行こうと云うて、今晚は中田に敬意を表すと常談口で細君に着物を出させ、信一を伴うて門に出た。當時彼は玆から吉原の裏門へゆく坂道を「十五分間小径」と名づけていたが、其道の方へ友の足は向き、オヤと思つて信一は続いた。

「立つ前に逢つた方よいねエ、自分も今晚は、見る故」

友の甘い味いを彼はうけいれた。

「君は、女の人が僕を何う見たかを、たずねるのだね。君と女の人と見方が似るか。わかるからね」

「では、今晚女のいうことを、出先で手紙に書きます」

「逢った工合で、旅行は、変わるかも分らぬねエ」
「えエ」

翌日彼の処へ青舎の端書が届いた。啓、昨日之私は言葉も行いもすこし脱線氣味の処があつたようですゆるして下さい御旅行は決定しましたか是非そうなさる事を祈ります深く祈ります今日は朝からからだの工合がわるかつたのですが今はよくなって仕事しております。

信一は岐阜で約束の手紙を書いた。出立際に逢つても引留られる程でなかったが、友は別れて旅立てと云寄越した、彼女の印象が悪いかと思えた。青舎の返事は田舎へ来た。

ゆうべは根岸の俳三昧＊はいつさんまいでした此頃はあなたが出席されていないと淋しい心持になりますあしたは私の家もう一夜は三の輪みわの三昧私はこの淋しい心持を続けねばなりませんね

あの時の第一印象は御目にかかる形式がへんなものであつたのでめっちゃめっちゃになってしまいましたあの方が私を外的ではありますすがかなりよく見ておられたので驚きまじや驚くというのは仰山きようさんのよ

うですが私からは第一印象の外的丈でも握み得られなかつたからですどうも私というものが時に臨みてしっかりすることが出来ないのを恥じます

それでこのことはこれだけにとどめておきたいと思ひますあなたとして定めてはがゆい様に思われましようがどうか忍んで下さいそうしてこのことについてはお考えないで下さい色をつけないで下さい

あの部屋で病人のようだと申上げたのを氣にかけて下さいますな何んでもないのですたんにあの時の感じに過ぎないのです

さだめし御淋しいことがありでしょう万々御察し致しますどうか大事に旅行して下さい

一昨日徳永君へはがきを差上げましたそれは内容は申上げずに只信一君の今の心持をやすらかにして上げて頂きたいというようなぼつとした事を申上げたのです万事あなたが徳永君に御相談でもされる場合のきっかけにもと思つたからです

先生へは私が話をしました先生の心持は良好です御安心なさい

たよりを書くということは氣をまぎらすものです

御たよりを下さい徳永君に宜敷御伝え下さいこれで
擱筆しますどうも言足らないのですが

五月六日

青 舎

——□屋ではお附合で上った客には女を逢せない極
りの由で、青舎は僅すれ違ひに相見た。あの晩部屋は
扉とよぶ西洋間で、彼の寢床の傍に皆が附添うてい
て「病人のようだ」の詞が出た。其処へ、彼女が新造
と下新をつれて入って来、友は起って出て往ったので
あった。彼女は友達のことを「新規さんですわ」と云
うた。シンキなる詞が呑込めず何度も尋ねて、若々し
い人当世風、という意味が分った。青舎はすれていな
い瑞々しい人故、其方面が第一番に映ると思えた——
青舎の手紙を徳永翁に見せた。徳永翁は商用で月末
に東京へ出る由であった。

彼女の手紙が岐阜から廻ったのと共に二通来た。

昨日はきれいなはがき有がとうございましたまあ
長良川という川はずい分きもちのよきそうな川です
わねわたしとあなたと長良川とやりに手に手をひい
て旅行することもある事でしようねあたしそれをた
のしみにして待っておりますわ、お手紙はきょうた

しかに拝見致しました益多屋のお千代さんからもよ
ろしくと申しましたおハガキはたしかに御らんにな
りましたそうです、あなたがお立になってから早い
ものですわねもう五日にもなりますわね五日や
そこいらでもあたしずい分たったと思ひ舛わあなた
お里方へいらしておやご様がさぞおよろこびでし
うねあたしもうれしゅう存じ舛又古里ですぎた前の
事をお思いでしょうねそしてさぞおなつかしき事で
ございましたうねあなた旅故おからだをおきにつけ
て御無事でね、先はお返事まで 十六日のひる前に
て

あなたの松子 たびの信さま 返事かく心はゆく
御もとへ わが心は……

そんな風に信一は旅行に出て二十日程の日数、旅行
の楽し味は脱がさず味うて居た。そして旅行で得た楽
し味で、心持は幾分明るくなっているのであった。

(如上の出来事があった)

根岸に行くと、何時もの鏡ノ間を通って、一足下り
る能舞台の裏側の座敷——その書斎の真中程に、且師
は一閑張の机を据えて居た。